



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 熊谷鉄太郎の生涯と思想：戦前を中心とした覚書

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 室田 保夫   |
| 雑誌名 | 関西学院史紀要   |
| 号   | 27  |
| ページ | 121-156   |
| 発行年 | 2021-03-15  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10236/00029474">http://hdl.handle.net/10236/00029474</a> |

# 熊谷鉄太郎の生涯と思想

——戦前を中心とした覚書——

室田 保夫

はじめに——研究史をめぐって

ここで取り上げる熊谷鉄太郎という人物はいったい何者なのか。如何なる人生を送った人物なのであろうか。先ず以下の文章を見ておくことにしよう。これは熊谷五〇歳の著『宗教の本質』(基督教出版社)の「序に代へて」冒頭の文章である。

八、九歳の頃であつた——ふと気が附いてみれば海上遙かに孤立してゐる大岩の上に一人取り残されて居るではないか……。淋しいとも恐ろしいとも、こはいとも名状し難い情緒が全身に漲り、声の限り助けを求めつゝ、右に左に走せまはつたが、寄せては返す大波の他に答ふる者とはなかつた。泣いて泣いて泣き切つた時汗びつしよとかいてやさしい祖父(じいぢや)の懷に寝てゐる自分を再び発見したのであつた……。

熊谷は続けて、「神なく仏なく世を呪ひ生を厭ひつゝ、北海沿岸に一人彷徨ふて居るうちに、ゆくりなくも札幌メソヂスト教会の祈禱会に導かれ、こゝに初めて天地の間に『愛の父君』の居

まし給ふ事を知り、そのみ懷ろに抱かれてゐる自分を見出した時、幼少の頃見たあの恐ろしい夢を思ひ出さずには居られなかつたのである」、そして「あの夢こそは実に私の全生涯の縮図であるやうに思はれる」と記している。熊谷は日本の視覚障害者福祉やキリスト教史上では少しは名の知れた人物である。しかし彼の畢生の事業「盲人伝道」は忘れ難い重要な業績である。さしあたり熊谷についての先行研究をみておくことにしよう。

熊谷について最も一般的な伝記は、玉田敬次の著した『熊谷鉄太郎…見果てぬ夢』（視覚障害者支援総合センター、一九八五）である。そして近年、森田昭二『盲人福祉の歴史…近代日本の先覚者たちの思想と源流』（明石書店、二〇一五）によつて日本の盲人福祉の先駆者として実証的に評価されている。<sup>①</sup>さらに視覚障害の人々に限定して出版された「盲人たちの自叙伝」というシリーズにも入っている。<sup>②</sup>また、熊谷の簡単な紹介としては石松量蔵『盲人とキリスト教の歩み』（日本盲人基督教伝道協議会、一九五九）、谷合侑『チャレンジする盲人の歴史』（一九八九、こずえ）や『道ひとすじ…昭和を生きた盲人たち』（あずさ書店、一九九三）等があり、事典類でも取り上げられてきた。<sup>③</sup>

ところで熊谷には三冊の自伝がある。戦前に『闇を破つて…盲人牧師自叙伝』（一九三一、教界時報社）、戦後に『見えざる聖手…み手に引かれて七十年』（一九五四、基督教文書伝道会）と『薄命の記憶…盲人牧師の半生』（一九六〇、平凡社）がある。頁数は最後の『薄命の記憶』が二三九頁。『闇を破つて』一五二頁、『見えざる聖手』七〇頁である。この三冊は熊谷の生涯を語る時、重要な資料ともなる。一般的に自伝を出版する動機は様々である。熊谷の場合は、歳を重ねてきた己が人生への「感謝」「恩寵」にあり、盲人伝道を司る牧師という職業上、人生の

歩みを赤裸々に世間に紹介していく義務的意図があつたのかもしれない。ともあれ、彼の九四年にわたる生涯を、自伝を手がかりにしてみていくことにしよう。ただ、紙幅の関係もあり戦前までに限定しておく。もちろん自伝を引用する時、その性格上それを如何に客観的かつ実証的に検証していくかの作業が伴っていることは言うまでもない。<sup>(1)</sup>

## 一、苦難の少年時代

### (一) 誕生と家庭の不幸、青森へ

熊谷の人生を振り返ってみると、キリスト教への出会いと回心は、彼の人生の「大転換」であつた。しかし、それは「苦難の体験」という背景があつたからこそである。自伝三冊の内容はそれぞれ少しずつ相違しているが、彼の青春時代を描く時、『闇を破って』（再版、一九三二）を主に利用していく。その初版が上梓されたのは一九三一（昭和六）年で、比較的若い四七歳の時である。そこには「闇を破った」という自覚、意識の高揚があつたかもしれない。ともあれ彼の誕生の時空に降りたってみていこう。

熊谷鉄太郎は一八八三（明治一六）年五月二八日（旧暦とある）、北海道の瀬棚郡美谷（現久遠郡せたな町瀬棚区美谷）という漁村に生まれた。生家は祖父母夫婦を含め大家族であつたが、父西蔵の放蕩が彼の人生を狂わせていくことになる。父は四人兄弟の長男であつたが、その行動は祖父、母、兄弟へと波及し、家庭は「修羅場」と化していく。「昨日は博奕、今日は酒、明日は女と狂ひまはる。滴々としたゝる命の汁の結晶かと思はれる少しばかりの祖父の財産には、日に日にマイナスが加はるばかりである」（『闇を破って』一二頁、以下『闇』と略す）と当時を記す。

かくして熊谷が三歳の春までには大黒柱は破滅に向かっていく。そして子供のために父の暴力に堪えかねていた母は我慢の限界に達し家を出たため、幼い鉄太郎の面倒を見たのは祖父であった。

## (二) 失明、再び北海道へ

一八八六(明治一九)年、三歳になって、「永遠に忘る、事の出来ない大事件」(『闇』一五頁)が起こる。それは三歳の秋の失明という降りかかった苦難である。その年の春に家族一同は祖父の生まれ故郷に近い青森へ移住していた。この年は全国的にも悪疫が流行し、猖獗をきわめたコレラが下火になったと思えば次に天然痘が流行する。多くの家で疱瘡患者を抱え、熊谷の家庭も例外ではなく、特に鉄太郎は重症となった。この時、不眠不休で看病にあたったのが祖父であった。命は辛うじて助かったが、その影響で失明する。彼は「春は来れども花咲かず秋は来れども月澄まぬ」闇の世界に、閉じ込められねばならぬ事となった(『闇』一七頁)。祖父は願掛けまでして孫の回復を願ったが、所詮無駄であった。失明のため物入りが嵩み、ますます一家は窮乏に陥り、再度、北海道島牧郡西南端の鯉場ツブトラケ、その後カラスへ移住し、最後は小田西に落ち着く。

彼は当時を「一生涯中、最も懐しい所は此の小田西で、次は何といつてもツブトラケである。小田西へ移つてからも尚五六年は、春毎にツブトラケの鯉場に行くことを例としてゐた」(『闇』二九頁)と回顧する。そこでは「ツブトラケのボンズ(坊主)」と呼ばれ、村の子供たちと共に生活していたが、「十一歳の秋も淋しく暮れて、裏の笹藪にたばしる霰の音に大自然のオーケストラが聞かれるやうになった頃、村の子供達の興味を煮えくり返へさせる新世界が創造された」

『闇』四六頁）。そこで初めて「学校」が設立され、「昨日まですべての行動を共にして来た村の子供達は、今日はみんな学校に行つてしまつた。それはめくらの私の入ることの許されない世界」（同右）であつたと述懐するように、疎外と排除された辛い経験であつた。この間、祖母も亡くなり、父も家を離れた。

### （三）青森へー小田西に帰郷、そして寿都へ

熊谷は二三歳になつて、将来の生計の道をたてるために再び青森にいく。幸い彼が「盲人中稀に見る大人物」と評する高井健益という鍼医の門に入ることが出来た。当時の教育方法はすべて暗記という方法であつた。そして三年程の間に解剖、生理、病理を一緒に納められた本をすべて暗唱出来るくらい勉強した。こうして青森での三年間の生活が過ぎ、「按摩」の仕事を得し、未来に向けて一步の前進があつた。ここでは師匠高井からの学恩、そして東京盲啞学校の存在を知り、点字を覚える一方、他方、「博打」や「浮かれ節」など、色々な「悪いこと」を覚えた。そして再び北海道小田西に戻つたのは一六歳の時である。

久方ぶりに帰郷した小田西は、田舎とはいへ変化していた。熊谷の夢は東京の盲学校のことであり、思い切つてその「規則書」を取り寄せ、この規則を暗記するほど頭にたたき込んだ。ニシンで儲ければ札幌か函館に出してやろうという祖父の言葉に一途の望みはあつたが、不漁で夢も儚く消えた。最後の手段として、熊谷は十七歳の時、この小田西から抜け出すという思い切つた行動を取つた。

熊谷が落ち着いた先は寿都であつた。寿都は彼の住んでいた海岸地域からみれば大都会である。

人口は約四千、戸数約一千戸の港町、大きな親方衆も何軒もあり、寿都は島牧、寿都、歌棄、磯谷の四郡を統轄する支庁もあり、郡役所、有名な郡立寿都病院もあった。そこで糊口を凌ぐ為に、当地では名高い新栄町の遊廓があり、そこで「流し按摩」(「たたきアンマ」)をすることとなる。<sup>(5)</sup>

この時期を彼は「最暗黒の一年間―地獄のどん底・危機一髪」(『闇』七七頁)と評している。紅灯下で暮らす女性と自分とは何某かの共感があったが、熊谷自身は底辺社会からの脱出を願望していた。

この最暗黒(闇)の境遇下で、一縷の望みは札幌に盲学校が設立されたというニュースであった。この希望を胸に秘めながら、寿都脱出を窺っていたが、漸く札幌までの旅費が工面出来、それを実行に移す時が訪れる。「歓楽の街を後にして夕闇に閉されたアルプスの山に登りゆかんとするのは馬鹿の骨頂である。あらゆる危険と、凡ゆる不安と、凡ゆる困難とが彼を待つてゐるではないか」(『闇』九〇頁)。こうして現実の暗黒から抜け出せたのは一九〇〇(明治三三)年二月のことである。自らの意志で現実から脱出し未来に託する覚悟でもって札幌を目指す。それは熊谷の青春への訣別、真の自立への旅立ちであった。

## 二、札幌時代―キリスト教へ

### (一) 札幌美以教会で受洗

胸躍る心で札幌に着した熊谷は早速、設立予定の北盲学校を訪れる。しかし、一縷の望みをもってきた北盲学校は新築計画中のため、休校状態であった。<sup>(6)</sup>一応ここに席を置いたとはいえ、その年の四月に再開でなく、それどころか明確な開始の時期が示されなかった。そこで学んでいた学

生も退学し、進路を変えているような状況であった。こうした失念の中で、盲学校長大澤銀之信から教会に行くことを勧められる。<sup>(7)</sup> この思い切った教会への参加が彼の人生を大きく変えていくことになる。

大澤に勧められ熊谷が訪問した教会は札幌美以教会であった。現在の日本キリスト教団札幌教会のホームページ（二〇二一年一月閲覧）に依れば、「ウイリアム・クラークの感化を受けた札幌農学校第一期生の佐藤昌介ほか一四名が、函館在住のメソジスト監督教会宣教師M・Cハリスより洗礼を受けたことが本教会の始まり」とされ、「一八八九年（明治二年）九月七日に札幌美以教会を組織し、布教の届けを出し」、この日を札幌教会設立の日としている。初代牧師は松浦松胤（一八九二―九三）で、次に関沢義之助（一八九四―九七）、そして熊谷が訪れた時の牧師は三谷雅之助（一八九八―一九〇一）であった。<sup>(8)</sup>

熊谷は初めて出席した模様を「二室の中央に札幌式の薪ストーブが暖かく燃えてゐる。之を囲んで二十余人の男女が如何にも睦まじさうに話し合つてゐる。他人同志とは思はれぬ程の親しみが部屋一杯に充ち溢れてゐる——彼等は実に兄弟姉妹なのだ！」（『闇』一〇〇頁）と述懐する。その中には佐藤昌介博士（札幌農学校長）、高杉栄次郎教授、仁平豊次（弁護士）、佐藤博士夫人、三谷牧師夫人、そして石澤達夫、小金井解三らがいた。集う人々の雰囲気、皆の歌う讚美歌は彼にとってこれまで経験したことのない別世界であった。

此処こそは、実に父のみもとであらねばならない。人間社会のどん底を流れてゐる一大底流に押流されて、こゝまで漂泊して来た私には、——潔いもの、美しいものに曾てふれたことのない私には、——鳴物といへば、芸者の三味線か法界屋の月琴しか聞いたことのない私



には、——殊に最近に於て廓の毒瓦斯で正に窒息せんとした私の魂には、潔く温かい此の集ひは、実に浮世の外の驚異すべき世界であつた。さしにも頑固な私の魂も、此の大きなコントラストに打当つては碎かれざるを得なかつたのであつた（『闇』一〇二—一〇三頁）。

そして、彼からみれば当時、雲の上のようにみえる人たちが、見ず知らずの「虱だらけの一小僧」を人間として接してくれることにも驚愕せざるを得なかつた。キリスト教とはこういう物なのか。生涯、彼の人生にとつて差別と逆境の中で身を置いていた自分を「かえつてきた兄弟」のように喜んでくれる、この雰囲気とはいつたい何なのか。今迄、無神論者であつた熊谷はこの場所、暗黒の中から輝く別世界の居場所を見出したのである。

## （二）ヨハネ伝九章、受洗

一人、下宿家にいる時も、教会仲間のあたたかい訪問もあり、そこで讃美歌や聖書なども教示された。その一つ一つの聖句の意味深いことが難解であつても、意味を次第に理解し彼の心を捉えていった。「ヨハネ伝」は彼の愛読の一つとなり、とりわけ第九章は彼の心の琴線に触れた。

「ラビこの人の盲に生れしは誰の罪なるや。己によるか、又二親によるか」——略——

「イエス答へけるは、この人の罪にあらず、またその二親の罪にもあらず……。彼によりて神の業のあらはれんためなり」（『闇』一一八—一一九頁）

熊谷はこの聖句に出会つた時、「私は手を拍つて『さうだ！』と叫んだ」（『闇』一一九頁）。まさに長く心に澱んでいた物がこの福音書記の記した一言によつて溶解したのである。

私の失明といふ出来事は、無意味な偶然でもなく、所謂「神仏の罰」でもなく、無始のは

じめから積んできた業の報いでもなく、天父の大聖心によつて計画された摂理である。こゝには、感謝がある。希望がある。新しい努力の源泉がある。早速、飯田先生の所へ飛んで行つて此の事を話した。祈祷会に出て此の大発見を証した。私の人生観はこゝに全く一変した。  
(同右)

こうした状況の中で、彼は正式にクリスチャンとして歩むことになる。熊谷は三谷牧師より洗礼を受けた時を「父と子と聖霊の名によつて注がれた冷水の一滴一滴が、脳天から腹腸にまでしみるかと思はれた時、身ぶるひするやうな責任の自覚が勃然として湧き起つてきた」(『闇』一二六頁)と表現し、それは一九〇〇(明治三三)年八月の第一日曜日であり、一生涯中、その日ほど尊い日はなかったと回顧している。<sup>9)</sup>

ところで、肝心の北盲学校については失望の声しか聞かれない。盲学校は有名無実なものであり、札幌に來た目的は完全に失われていた。しかし一方で、キリスト者として生きていくという何事にも代えがたい物を得、加えて彼を理解してくれる先輩や友人を得たことは盲学校入学以上に大きな収穫であった。

札幌に来てクリスチャンとして生きる喜びを体得した熊谷は、北盲学校への失望が日々増幅し、逆に上京への情熱へと変わっていく。「一年超えて明治三十四年の秋頃から、北盲学校に絶望した私の上京熱は、最早、抑へがたい猛火となつて燃え上がつてゐた」(『闇』一二九頁)と。そこで三谷牧師夫人に相談し、教会内の「石部金吉」こと石澤達夫に相談することを進言される。かくて仁平弁護士、石澤達夫、札幌キリスト教会婦人同盟らの後援を取り付けて上京が決定した。時は一九〇一(明三四)年一二月頃であった。こうして翌〇二(明治三五)年一月二八日、遂に

東京の土を踏むことになった。この年、日英同盟が締結され、文明国英国は同盟国となった。

### 三、東京時代―東京盲啞学校

#### (一) 東京盲啞学校に入学

かくて熊谷は一九〇一年春、憧れの東京盲啞学校に入学することとなる。<sup>(10)</sup> そもそも熊谷が入学した盲啞学校の淵源は一八七五（明治八年）五月、古川正雄・津田仙・中村正直ら六人によって視覚障害者の為の教育機関を作る目的で「楽善会」が創設された時に遡及する。<sup>(11)</sup> 翌年、楽善会訓盲院の設立が認可され、七九年に築地に校舎が完成し、授業が開始されることとなる。その後、文部省直轄の官立学校となり、八七年に東京盲啞学校と改称、日本の盲啞教育の代表的な学校となった。九一年小石川区指ヶ谷町に移転され、〇九（明治四二）年には東京盲学校と東京聾啞学校に分離され改称されている。幾多の変遷があり、熊谷はちょうど東京盲啞学校時代の入学である。校長は小西信八であり、コースは鍼按科であった。こうして「日本点字の祖父」と称された小西校長のもとで、夢に抱いていた盲学校への入学が実現した。<sup>(12)</sup>

熊谷は一九〇二年四月の学校開始とともに、尋常科（普通科）三年、技芸科二年というクラスとなった。しかし教科書はきわめて不充分であった。ところで当時、好本督の著した『真英国』と『日英の盲人』は遅れている日本の盲界に大きなインパクトを与えた。<sup>(13)</sup> 視覚障害者教育の先進国たる英国と比較して、日本においてとりわけ点字の書物が圧倒的に少ないというハンディは最たるものの一つであった。ただ幸いなことは小西校長が米国土産として設置されていた点字製造機があり、これが活用されることになった。学校内に「鍼按学友会」という自主的な組織が結成

され、この優れたものの機械を活用して『盲人世界』という月刊の点字雑誌等の発行が実現した。また後述する『六星の光』という雑誌も刊行したが、これが日本盲界に果たした役割は多大であった。そして熊谷は盲啞学校時代に英語の勉強に力をいれている。一九〇三（明治三六）年の二期の始めに小西校長より五年生にあがることが告げられ、努力もあって学期ごとに進級していった。

## （二）キリスト教会での学び

学校で国語と漢文を教授していたのは高津柏樹であり、高津の仏教についての見識は深く、汎神論的仏教の立場にたって「一神論的基督教に対して、痛烈な批判を加へられた」（『闇』一三八頁）とあり、熊谷は唯物論的自然科学の洗礼を受けており、キリスト教信仰においても精神的に苦悩していた。かかる奥悩の中でトルストイの『我が懺悔』や黒岩周六（涙香）の『天人論』等も点字で読んだ。時まさに藤村操が「岩頭の感」を残して華嚴の滝で自死した時でもあり、哲学的、思想的な悩みを経験した。しかし『父なる神』の居まさぬ宇宙は、私の生きるに堪へない砂漠でなくてはならない」（『闇』一四四頁）という信念のもと、キリスト教信仰は続けていった。

それは上京以来、本郷にある中央会堂（本郷中央教会）に通う中でキリスト教理解を深化させていく。ここはメソジスト派であり、チャールズ・イビー宣教師によって一八九〇年に創設された。牧師は九九（明治三二）年六月から高木壬太郎であった。彼は一九〇〇年に駒込教会と兼任となっており、まさにこの時に熊谷は中央会堂に出席し、日々、キリスト教に接した。本郷という立地から東京帝大、一高らの学生も多数出席していた。また、この会堂には木村清松、堺勝軍、

村田平三郎、山口三之助らキリスト教の「五目飯」とも形容されるような、多彩な人たちが参加しており、彼等の教室や集会においても可能な限り出席した。そこはあたかも「得がたい大学の教室」（『薄明の記憶』一八三頁、以下『薄明』と略す）に匹敵する知識の宝庫であった。さらに海老名弾正の本郷教会にも出席し、時には仏教講演会にも出掛けたと回顧しているように貪欲に知識を吸収し、己の抱懷している難問への解答を探索していった。

### （三）曾木銀次郎とC・J・L・ベーツとの出会い

一九〇四年になると高木牧師が麻布教会に転会になり、熊谷は曾木牧師について駒込教会に転会している。熊谷は曾木から、毎日英語の聖書の訳読を教えてもらうという幸運にも恵まれている。さらに中央会堂のC・J・L・ベーツのバイブルクラスにも出席している。曾木とベーツは後に関西学院で再会することとなる。英語に熱心に取り組んでいた熊谷は中央英語夜学校に入学し、また石川角次郎の創設した聖学院にも入り英語夜学校に通った。学院の優秀な先生から多くの事を学んだ。とりわけ角次郎の実弟、英文学者石川林四郎によつて、米国の詩人ロングフェロー（Longfellow）のエクセルシア（Excelsior）という詩に出会う。これは彼の魂を揺さぶるほど思い出深いものとなっている。「いや高く」「さらに高く」といった意味のラテン語であった。まさに彼は「エクセルシア」という言葉のとおり、人生を駆け上がり行こうとしていた。熊谷は「目の見えるものが三年でやるならおれは五年でやろう。彼らが五年でかかるものならおれは十年かかってやり通してみよう、いや一生かかっても、死んでしかるのち止むべし——という決心を固めさせてくれた」（『薄明』一九〇頁）と前向きな姿勢であった。

『薄明』には「キリスト教ヒューマニズム」という一節がある。盲啞学校には校友会というものが、毎月一回例会で討論会や演説会をもつのである。しかしこれには女生徒と東京養育院から通う学生がいたが彼等は参加出来なかった。熊谷はこうした不合理な差別待遇を看過することが出来なかった。彼がその会長に就く条件としてこの解決に向け尽力する。「汝ら人をかたよりに見ることなかれ」「もはやユダヤ人もなくギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない、あなた方はみなキリストイエスにありて一つだからである」(一九三頁)という聖書の教えや平等観でもって、学校側を説き伏せ、養育院にも会費の件で折り合いも付き万事解決していった。これを熊谷は「盲啞学校始まって以来の大革命」(一九五頁)と評している。また日露戦争に対しては「非戦論」を唱えたりしたことである。多くは教会や説教等から学んだ人間観、ヒューマニズムからの抵抗であつたろうか。

#### (四) 盲学校時代の思想―『六星の光』から

東京盲啞学校には一八九二年から既述した『盲人世界』という点字雑誌が、九四年からは『盲生同窓会報告』が発行されていた。その二つの雑誌を合併し一九〇三年から『六星の光』(『むつぼしのひかり』)が発刊された。<sup>(15)</sup>一九〇九年の熊谷の「盲の手引き」<sup>(16)</sup>という論文を見てみよう。

ひとたび、ヘレン・ケラーの伝を読む者は、何人直ちにサリブアン嬢のあるに気づくべし。ヘレンが今日ある所以のものは、主として嬢の力なりと言うも、あえて言い過ぎには非ず。もし、それサリブアン嬢が長く失明の生涯を送り、パーキンス盲育院に盲人として教育せられ、ついに盲人として同院を卒業したる者(卒業後、目明きとなれり)と知らば、読者

は更に驚くなるべし。しかもヘレンが今日に至りえし意味は、さら明らかに読者の脳中に描かるならん。——略——（引用文中の注番号は省略した）

と述べ、終りに、「盲人自ら盲人を教育界の牛耳を執るに至るまでは、我が盲人教育の完全なる発達は、到底望むべからずと言わんと欲す。されば、心ある盲青年男女は大いに自ら修養し、他日の盲人新世界を作るべき土台石ともなり。迷える輩（ともがら）の手引きともなるの覚悟なかるべからず。学べよや我が友」と盲人教育の大切さを強調している。

熊谷はこの雑誌に他にも多くの論文を掲載している。<sup>(17)</sup>この学校を卒業してからになるが、『六星の光』一〇〇号（一九二二年三月二八日）に「六星の光第一〇〇号発刊を祝す」という小論（祝辞）を執筆している。ここで熊谷は一〇〇号までの歴史に関わる主なトピックを簡単に紹介しながら、次のような文章で結んでいる。

ああ六星、汝の光はかすかなりしかどよく我が盲界一部の闇を照らし得たことを感謝する。おおしくも幾春秋の雨露と闘いここにまた希望の春を迎え、ふくいくたる桜花の元にその光を益々輝かすべき時は来た。祝うべし、祝すべし、汝の名を多くのあらたむべきものを有するは我人のともに認むるところあらたむるはすなわち進歩である。常に進歩して止むなかれ、汝の前途は益々多忙。請う幸いに自愛せよ。

本誌第一〇〇号を記念するにあたり、おさえんと欲してあたわざる観想の一部を記して祝辞に代ゆとしかいう（最後に記者ならびに読者諸君の万歳を祈らしめよ）。<sup>(18)</sup>

このようにして一九〇六（明治三九）年三月、熊谷は四年間の学業を終えて無事、東京盲啞学校技芸科を卒業する。それは「さらに高く」新しい生き方を求めての船出であった。熊谷が卒業

後に就いたのは横浜の基督教訓盲院や東京の同愛訓盲院などでの教師、埼玉県の豪農大越家のマッサージ師として糊口を凌いだ。

横浜訓盲院はアメリカ人ミセスC・P・ドレーパーにより、横浜市内に「盲人福音会」として設立、一九〇〇年に神奈川県より私立学校として認可され、「横浜基督教訓盲院」と改称されている（『光を求めて九十年』、横浜訓盲院、参照）。一九〇九年からはメソジスト教会牧師の大喜見源一郎が経営する同愛訓盲院に移る事となる。同愛訓盲院は〇六年に創設されるが、当時は「浅草雷門の後のごてごてした仲店通りに一軒の民家を借り受け、教会と学校の授業」（『薄明』二〇〇頁）をしており、熊谷はここで普通科と鍼按科を一人で教えた。

ところでこの頃、彼の目的とした二つのことがあった。その一つは英語学習である。それは当時、日本語の点字書は少なく、多くの事を勉強しようと思えば、英語を勉強し古今の名著を英語の点字書で読まなければならなかった。もう一つは神学校に入りたいという望みである。卒業後の数年間は言わば人生へのさらなる準備期間であったように映る。それは英語習得や神学研究への期待である。そしてこの二つの夢は明治末年、神戸に移転したことを契機に実現していくことになる。

#### 四、関西学院時代

##### （一）関西学院へ

一九一二（明治四五）年二月、中村京太郎の勸奨もあり、東京を去り神戸訓盲院の教師として神戸に赴任し、左近允孝之進の創設した学校で働く。左近允は日清戦争従軍後に白内障によって



二六歳で失明<sup>(19)</sup>し神戸に移り、一九〇九年、神戸訓盲院（今の兵庫県立盲学校）を創設した。一方、同年夏、中村京太郎は好本督の援助によつて英国に留学することとなった。熊谷にとつてこれを見送るという「実に寂しい『鹿島立ち』（『薄明』二〇二頁）であつた。そして「次の留学はおれだぞ」と決心したという。

かくて熊谷は関西学院に入学し、ここ数年抱懷していた神学を学ぶことになる。関西学院は一八八九（明治二二）年九月、W・R・ランバスによつて神戸原田の森に創設されたメソジスト系のミッションスクールである。したがつて神学部は当初から学院の重要な部署であつた。何よりも心強いことは、東京時代にキリスト教や英語の教師でもあつたC・J・L・ベーツ（Cornelius John Lighthall Bates 一八七七―一九六三、以下ベーツと略す）と曾木銀次郎と関西学院で再会したことである。

## （二）ベーツと曾木銀次郎

ベーツは一九〇二年、東洋伝道への献身を決意して来日し、当初は主として東京、その後山梨の教会における宣教活動に従事した。<sup>(20)</sup>既述したように東京において熊谷はベーツのクラスで知己となつてゐた。そして一〇年九月に家族と共に関西学院に到着する。二年後の一二年四月、関西学院に高等部が設置され、高等学部長となる。そしてこの年、ベーツは「Mastery for Service」といふ学院の方針を発表した。後に彼が院長や学長に就き、関学のスクール・モットー（School Motto）として提唱されていくこととなる。<sup>(21)</sup>

一方、曾木は福岡中津の生まれである。<sup>(22)</sup>曾木は中津尋常中学校時代に山田小太郎の教導のもと

で英語を学んだ。そして大阪に出て聖公会牧師マキムやモリスから指導を受け、川口居留地の三一教会に出席している。その後東京に出て聖公会ウイリアムズ監督からも影響を受けた。牛込教会の中山笑牧師から洗礼を受け、その後、関西学院で神学を学ぶことになる。卒業後は掛川、新潟、築地、中央会堂、浜松らで牧師に就いた。そして一九一〇年関西学院の神学部助教授として就任した。専門は心理学や倫理学であった。

関西学院ではすでに、私がかつて東京で世話になつた曾木銀次郎先生とC・J・L・ベーツ先生とが教授としてここに来ておられたのと、好本氏から吉岡院長に当てて依頼状が来ていたので、入学は簡単に許可され、翌大正二年の春私は関西学院神学部に進ぶこととなり、成全寮に入寮し、晴眼学生と一緒に寮生活をする事になったのです。（『薄明』二〇二頁）  
こうして熊谷は三〇歳にして「長年の夢の実現」を果たした。神学部では聴講生となり、学費は好本督によるものであった。高等教育機関の中で視覚障害者の入学は、戦前、特に明治期において困難な状況であったが、一九一三（大正二）年に関西学院は熊谷の入学を許可した。

### （三）学院での生活

熊谷は当然、晴眼者の中で唯一の全盲の視覚障害者であった。「然し先生方も学生達も皆、親切にして呉れるので、教室の仕事は楽にやつてのけられた。学生達と一緒に山登りもすれば旅行にも行く、点字の本を沢山持つていふという理由で、寄宿舎でも特に一人で一室占領することを許された外、凡ゆる面に於て便宜と協力を惜しみなく与えてくれた」（『見へざる聖手』四六頁）と学校当局と学生に感謝を捧げている。とりわけ在学中に特筆大書すべきことは、英国製の点字

辞書が与えられたことである。東京盲啞学校では「君一人のためにそんな事は出来ない」と拒否されたが、関西学院ではこれを海外から取り寄せてくれた。時の神学部長はニュートンであった。

或る日、神学校のチャペルで、私が特に前に呼び出され、この膨大な点字辞書の授与式が行われた。ニュートン博士のお話があつた後、私が感謝の言葉を述べる順番になつた。立つて二言三言話すと、もう胸が一ぱいになつて、言葉が続けられなくなり、はふり落つる涙を止めるすべもなく、そのまま立ち往生してしまつた。チャペルは万堂水を打つたように静まり返つていた。やがてベーツ先生が立たれて、私の東京に於ける苦心などを語られ「意志と努力の尊さ」といつたような事を話して居られるうちに、私の興奮もややおさまり、どうやら感謝の言葉を述べる事が出来た。然し私の感謝は言葉ではなくて、これ以上のものなのであつた。(同右、四七頁)

彼にとって点字辞書は何にも代えがたい垂涎的であつたし、それが与えられた時は筆舌に代えがたい大きな喜びであつたろう。

また熊谷は入学と同時に神戸東部教会でオックスフォード先生の聖書の話を通訳したが、それは三年間続けられた。この経験は彼の英語力を一段と向上させる絶好の機会でもあつた。先生からは札にと、新しいタイプライターが贈られた。そして英文で簡単な自叙伝を書いたが、これがカナダの雑誌に掲載され、単行本となつて出版された。これによつて学資も得られた。筆者はこの著は未見であるが、発見出来れば彼には四冊目の自伝があることになる。

かくして一九一六(大正五)年三月、三年間学んだ関西学院の神学部を卒業し新しいキリスト教伝道の職に就き、大阪に任命されることになる。「私はいよいよ、人生の荒波の中へ、牧師と

いう盲人の新職業実現という負荷をもって出発することになった」（『薄明』二〇四頁）と吐露している。

五、キリスト教伝道者として―大阪へ

（一）結婚と岩橋武夫との出会い

熊谷の伝道は大阪の市岡中学校附近で、この学校の前の民家を借り受け講義所を開くことから始まった。大阪には東部、両国橋、福島 of 三つのメソジスト教会があったが、赴任したところは信者もなく、いわゆる開拓伝道であった。ここで聖書研究会や日曜学校、日曜日朝の説教など精力的に伝道活動を展開した。時には福島教会や神戸のランバス伝道女学校での外人教師の通訳等も受け持ち、「新職業」と自認する己れ自身を励ましながら昼夜奮闘した。ちなみに『大正六年日本メソヂスト教会第拾回西部年会記録』には「市岡講義所 補助（熊谷鉄太郎）」（二七頁）と記されている。

そして熊谷の生活において大きな変化が起きたのは、一九一七（大正六）年四月二日、福永みねとの結婚である。場所は福島教会で行われた。相手のみねは関西学院の友人福永盾雄の妹であった。お互い何もない同士の結婚で、花嫁道具も行李一つと古い布団一組というものであったと回顧している。関学時代の友人浜崎次郎の手紙に「市岡にも春が来た」（『薄明』二一九頁）という言葉があり、貧しい生活ではあったが彼にとっては「人生の春」であった。

結婚の翌月、熊谷は大阪市立盲啞学校で講演を頼まれることとなる。この講演をとおして、そこで学んでいた岩橋武夫との出会いがあった。<sup>(29)</sup>岩橋は熊谷に会うや「失明後初めて生き甲斐のあ

る人生を見出したような気がします」（『薄明』二二二頁）と感想を述べた。そして近くの救世軍小隊を借りて盲学生のための聖書研究会を開くことになる。岩橋もヨハネ伝九章の説明にも大きな感動をもたらした。岩橋も将来、新しい職業を目指していることを知り、関西学院の英文科を受けることを岩橋に推奨する。この案に彼の両親も喜んだ。かくして「関西学院の入試まで私と武夫君の必死の英語学習が始まりました」（『薄明』二二二頁）。岩橋は雨の日も風の日も妹の手に引かれ市岡まで通う。トマス・ 그레이、アルフレッド・テニソン、マコーレーなどを勉強し、またタイプライターも教えた。そして熊谷は岩橋を関西学院に連れて行き、学院の先生や外人教師、ベーツにも紹介した。こうして岩橋は関学に入学し、己の道を切り拓いていく。

## （二）盲人文化運動―東亜盲人文化協会

大阪赴任間もなく熊谷は「東亜盲人文化協会」という視覚障害者の文化団体を計画した。それは大阪に中央盲人会館を創設し「盲人に関する調査研究活動を行ない、東亜の盲人文化の向上に寄与するために、上海・南京・尼港・香港などで宣教師の経営する盲学校と連絡をとり、将来は英国のピアソン氏の経営する英国盲人協会のようなものにまで発展させたいという構想」（『薄明』二〇八頁）であった。

この計画は一九二〇年より開始される。同年二月二八日の『大阪毎日新聞』には「盲人文化運動開始 熊谷盲教師の根性に成れる 東亜盲人文化協会」という見出しで次のように報じている。日本基督教界に於ける盲人牧師として知られたる神戸関西学院出身の熊谷氏は自ら外国語の研究及神学哲学の研究に関する卅余年間の経験により盲人の向上に就き予て極度の同情

を有し居れる人なるが盲人をして人類の文化を共有せしむる目的により今回中村平三郎、吉田利一郎、小泉鉄管商会主、早川商会主等富裕なる出資者の賛同を得『東亜盲人文化協会』といへるを組織し概要左部の如き事業を實行する筈にて二十六日午後六時より大阪両国橋教会に發起人会を開催し、上記賛同者は固より名出牧師、佐島大阪青年会理事、宮島大阪盲啞学校長、赤沢牧師、神戸の賀川豊彦氏等十余名出席熟議するところあり、更に実行委員を挙げて各般準備に着手することとなれり。

そして具体的に「内部的事業」と「外部的事業」とに分けて、それぞれの事業を列挙している。「内部的事業」に挙げているのは、▲各種点字雑誌の発刊▲普通書籍の点字翻刻▲点字の普及▲点字の改良▲欧米先進国の盲人教育法輸入▲盲人教育に関する図書館の設置▲従来職業の保全▲新職業の研究▲職業の紹介▲盲人寄宿舎の設備▲盲人事情の調査▲盲青年に対する高等教育の補助である。一方、「外部的事業」としては▲盲人保護法の制定▲点字の公認運動▲按鍼試験法の改善▲社会の盲人保護方法の攻究▲失明防止の方法攻究といった事業である。こうした構想をもつて展開されていった。

## (二) その展開

かくて愈々、東亜盲人文化協会の趣意書も発表された。<sup>23)</sup>

欧米盲人教育者の意見に従えば、盲人教育とは、失明によりて生じたる一切の障害物を取り除く「手段」であります。失明によりて生じたる一切の障害物の取り除かれたる以上、盲人といえども、もはや「定めなきに」を託ちつつ「憂きことをのみ」とする憐れむべき喪失

者でありません。生を楽しみ、人道を愛し、人類の文化に貢献しつつ、これを共有する道理たる一個の人格であります。かくの如くなるは、畢竟、教育機関や読書機関（点字出版所および図書館）の設備ないし職業的に盲人を援助するあらゆる機関が完備しておるからであります。現代は、組織、制度の世の中であります。これが完全と不完全とは、社会が栄ゆるか滅ぶるかの分かれるところであります。まして、五感中もつとも大切な視力を失った人、目明きと肩を並べて競争場裏に成功をおさめようとするのは、必ずや完全なる組織、制度の援助がなくてはならぬことは、もつとも見易い道理であります。

しかしその後の展開については詳らかではない。これには米国南メソジスト教会監督のランバスと早川商会主が後援者となったが、二人とも亡くなってしまう。構想した協会の宣伝や計画のために費やしたお金は戦後不況と相まって借金のみが残ったが、市内法庵寺（真言宗）の住職和田達源が借財を払ってくれ、この運動は失敗に終わったが、これが新しい文化運動の始まりでもあった。

その一例が「触覚による文化見学」というものである。これは現代文明の利器を集めて、視覚障害の人に手で触れて理解していくという試みである。これには大阪の多くの視覚障害の人が参加し、大きな成功となった。これに協力してくれた中に幸徳事件との関わりがある高尾亮雄もいたのも興味深い。そして次に大阪中央公会堂を会場にして「全国盲人大会」という企画も実行し、さらにエロシエンコの講演会も開催した。<sup>(2)</sup>そして、盲人文化運動としては、橋本甚四郎の点字出版事業とエスペラント運動の二つである。エスペラント運動、これには先述の高尾らのエスペランティストが流入し、岩橋武夫らも加わっていくことになる。そしてエロシエンコを大阪に

招聘することとなり、彼は一〇日ほど大阪に滞在し、エスベラント研究を助けた。

盲ヴァイオリニスト杉江泰一郎のことも触れておこう。杉江は京都盲啞学校を卒業し、東洋音楽学校に入学し、卒業後は日本初の盲ヴァイオリニストとして生きていこうとした。練習を積み実力的には優秀なヴァイオリニストとなったが、視覚障害というハンディ故にそれでもって身を立てることができない事実直面する。熊谷は大阪にいる杉江を探し当て自分の家に招き入れ、「このことは一人杉江君だけの問題ではなく、日本盲人の将来にかかわる重大な問題」（『薄明』二二二頁）と認識した。そして大阪市立盲啞学校の宮島茂次郎に依頼し、同校の音楽教師に採用してもらったこととなった。この宮島に対する必死の援護は熊谷にとって自己の「生命を賭して闘っているこの大理想」（同右）、すなわち「盲人新職業論」の実現であった。

一九二二（大正一一）年四月、熊谷は大阪から山口県柳井に転任する。同年五月、大阪毎日新聞社の事業として『点字毎日』が発刊されることとなった。その中心人物は中村京太郎であった。一方、二三年には「盲学校及聾啞学校令」が公布され、盲学校、聾啞学校と分かれ、視覚障害児・者の学校教育へ転換される起点となった。時代は昭和に入り、二九年には世界大恐慌が勃発し、世界状況はますます混沌とし、一方、日本は大陸に着々と侵攻していった。そういう状況下で熊谷は二七年には山口県宇部教会に赴任し、翌年には按手札を受け正式の牧師となり、三一年に国際会議出席という思わぬチャンスが訪れることになる。<sup>(25)</sup>



## 六、国際盲人奉仕者会議とドルー大学留学

### (一) 国際盲人奉仕者会議（ニューヨーク）への出席

熊谷にとつて、海外に行くことは夢のような出来事である。以前、中村京太郎の英国への旅立ちを淋しく送り、また大正末期に後輩でもある岩橋武夫が英国スコットランドのエジンバラ大学に行ったこともあり、「海外へ」という一つの夢が実現した。

一九三一（昭和六）年四月、ニューヨークにおいて国際盲人奉仕者会議への日本代表のメンバーに選出されることとなった。参加メンバーの多くは、東京盲学校の秋葉馬治校長、名古屋盲学校の橋村徳一校長、点字毎日の中村京太郎主筆らであり、それぞれ遠征費用のバックを有する人たちであった。その点熊谷は自分で遠征費用を工面する必要があった。何とか友人、知人の援助を求めて三千円ほど集められた。そして熊谷だけシアトル経由となった。しかしシアトル、バンクーバー、ヴィクトリア等で講演を依頼され、予想外の二百七十ドルを入手し、ニューヨークに着する。宿舎はニューヨークの「ホテル・ペンシルヴェニア」十六階の部屋であった。東京盲学校の秋葉校長と同室であった。彼は回顧する。

思えば「ツブタラケ」の丸子屋で猫の子一匹を友として育った「ツブタラケの座頭ボンス」が今この世界の都ニューヨークで、しかもこの大ホテルの一室に横たわり、世界三十六カ国から集まって来るその道の大家と手をたずさえて、人類福祉の一環たる世界の盲人の問題について、互いに討議し計画しようとしているのです。（『薄明』二二六頁）

会議はこのホテルの十八階の大会室であった。三〇〇人程の出席者であり、盲教育、盲人の職業、世界盲人の文化交流、提携等が論題された。熊谷も日本代表として彼の自説「新職業論」を展開し、

点字本の交換について提案を行った。毎日朝九時から講演と討論、歓迎会、晩餐会、円宅会議等々ぎつしりとスケジュールが組まれ、毎晩一二時くらいが就寝時となった。また加えて一週間ほど、アメリカ各地の盲学校、盲人施設見学があった。フーヴァー大統領にも面会し、見学のツアーが終わると大会が再開され、三週間の会議が終了した。

## (二) 大会後の各地の訪問とドルー大学での学び

大会終了後も熊谷は小室牧師の案内でメトロポリタン・ミュージアムにロダンの彫刻を見学に行っている。ここで視覚障害者として直接障ることが出来る許可書を得て、触れることによってロダンの芸術の力に強い感動を覚えた事を記している。日本で試みた「触覚芸術」の経験が蘇ってきたことと思われる。また、小室と同伴で、二月の或る日、ヘレン・ケラー宅を訪れている。<sup>(26)</sup>その後、シカゴに行きミスター・ウィクリーを尋ね、シカゴの街を案内される。そしてテキサス、メキシコを通してロサンゼルスに落ち着く。ここで熊谷夫妻の仲人であった徳憲義に逢い、太平洋沿岸を講演・説教旅行をしてまわり、滞在費と学費を得ている。つまり米国行きのもう一つに大きな目的があった。それは九月からドルー大学の神学部で学ぶことで、その為にニュージャージー州のマディソン市へ行く。

ドルー大学 (Drew University) は一八六七年創設のメソヂスト系の大学であり、創立当初はドルー神学校 (Drew Theological Seminary) である。彼が訪れた時はリベラルアーツの大学となっていた。日本人では本多庸一、吉岡誠明、そして河辺満麿もここで学んでいる。熊谷はこの神学部で九月から二月まで個室の寄宿舎と奨学金を得て研究生生活をした。その後、ニューヨーク

クに出て盲学校とボストン近郊のパーキンス盲学校 (Perkins School for the Blind) を訪れ、四月からカリフォルニアとハワイで伝道を助けて一九三二年秋に帰国した。この一年半の間、憧れの外国での国際会議と講演、訪問、そして留学とそれもほとんど一人旅であった。国際的な感覚もすでに身に付けた人間へと成長していった証明でもあった。

熊谷が米国に行っていた時、日本は一九三一（昭和六）年九月に満州事変が勃発し、その後の軍部の侵攻は続いていく。そして翌年には溥儀を担いで、満州国を作り上げた。丁度、熊谷が帰国時に合わせるように大きな政治的事件が続いていたが、そうした一連の動きを彼は米国で知っていたのだろうか。確かにこのような動きは『見えざる聖手』でも叙述されている。リットン調査団が日本の侵略に対して調査をし、それは認められなくなり、遂に日本は国際連盟を脱退していく。それはアジア・太平洋戦争へと続いていく戦争への道であった。

## 七、帰国後の牧師活動―『宗教の本質』をめぐる

### （一）『宗教の本質』の上梓目的

帰国した熊谷は広島、神戸の御影で伝道活動をし、一九三四年三月に彼は『宗教の本質』という著書を基督教出版社から上梓する。最初の「序に代へて」ではこの著の意味や目的が書かれており、「昭和九年紀元節の日」、「広島県観音町 日本メソジスト広島西部教会牧師館」となっている。

この著作の扉には「本書を信仰の父母 三谷雅之助先生並びに同令婦人に献ぐ」とあり、一九三三年三月から九月迄の七ヶ月間『福音と思想』誌に連載されたものであって、それをまとめて一冊の本にしたものである。<sup>(27)</sup> 三年前に刊行した『闇を破って』での「東京へ出てから」という

一項は「科学、哲学（殊に）仏教等々と種々様々の思想の渦巻に巻き込まれ、危く破船の浮目を見んとした著者の悩みの記録」であり、本著はその悩みの中から生まれ来た結論の一部であると記す。渺たる一冊に過ぎないが「信仰と智識との調和を見出しかねて苦しんで居る求道の友に献げ、いさ、かなりともその道案内となる事が出来れば」と上梓目的を披瀝している。

## （二）その内容

その内容は次の四講から構成され、その骨子のみみておきたい。

第一講「宗教の定義」では宗教とは「求める人間と求められる神との間に行はれる交渉は、少くとも人格的の要素を想定として」（七頁）成り立っている。したがって「宗教とは神と人との人格的交渉である」（九頁）と定義する。

第二講「宗教の起源（その一）」では、その重要な要素として「主観的要素」と「客観的要素」の二つがあるとする。この講では特に「主観的要素（内的）」について説明する。つまり主観的要素とは「人間性（Human Nature）」そのもの、一部であって、決してこれを引き離すことの出来ない有機的関係を持つてゐるところの精神現象」であり、換言すれば、宗教は「実に最も重要な人間本能（Human Instincts）」（二一頁）であるとする。

第三講「宗教の起源（その二の上）」と（その二の下）では二つ目の「客観的要素（外部）」について「宗教の起源はこれを内面的に考察すれば、人間性そのもの、うちに、殊にこれを個有した一種独特の本能中に求めらるべき、これを外面的に見れば、人間の持つて生れたこの特種の本能を満足せしむべき、『特種の対象物』として宇宙のあらゆる現象を通じてこれにせまってくる

ところの、『或る物』のうちに、求めらるべきものであると云ふ結論は何と云つても避け難いところだと信じます」（三九頁）と論じる。

第四講「神に関する考へ方即ち神の観念（神観論）」では、神に対する考え方「神観」について講じている。具体的には「多神教的神観」「汎神論的神観」「唯一神或は有神論（一神教）」について説明し、「多神教的神観」「汎神論的神観」の二つを駁し、三つ目の「唯一神或は有神論（一神教）」の正当性を主張し、「斯くの如く一神教的神観は、宗教的には勿論のこと、智的にも、道徳的にも、審美的にも、我々の全要求を満足せしむ得る、最も完全な（今日存在する種々なる思想大系のうちで）思想大系であります。従つてそこには、宗教と芸術と学問との間に、初めて円滑な調和の保たるべき事を高潮して止める次第であります」（七一―七二頁）と結んでいる。

このように、熊谷は東京盲啞学校時代からの迷いは消滅し、一神教のキリスト教を中心的な宗教として理解し、彼の伝道者としての根本的な思想を公にした。それは当然、関西学院での学びや伝道において確信を得た結論の披瀝であつたことは言うまでもなからう。

## 八、総力戦体制下で

### （一）牧師職の隠退

一九三七（昭和一二）年七月七日、日中戦争が勃発し、四月に初来日していたヘレン・ケラーも急遽帰国することとなった。この戦争によって日本はますます軍部の力が強くなり、翌年には国家総動員法が成立し、総力戦体制に入つていった。三九年には「宗教団体法」も通り、四〇年には紀元二六〇〇年の祝賀があり、日独伊三国軍事同盟も締結された。翌年一二月八日に、日本

は米国ハワイの真珠湾に奇襲をかけ、米英に宣戦布告してアジア・太平洋戦争が勃発していく。この間、戦争は次第に激しくなり、国家の弾圧もキリスト教界にも波及する。ホーリネスや灯台社、救世軍なども弾圧を受けることとなる。<sup>(28)</sup>かかる情況の中で「私を非戦論者といって告発する男がいたりして、特高に呼び出されるという事件が起こったのです。私は正面きつた演説をしたおぼえはありませんが、盲学校以来血肉化してしまった反戦思想は、どこかしら『説教』の中に出るものとみえます。」(『薄明』二三二頁)とある。こうして「教会に対する思想的、経済的負担」を考慮し、一九四〇年、牧師職の隠退を決意する。五七歳のことである。そして暫く鍼灸マッサージで生活し、世に隠れて暮らしていたが、思いがけず外国赴任の話が来る。それも戦争が厳化する状況でのことであった。

## (二) タイのバンコクへ

一九四三(昭和一八)年七月、外務省を通して日泰文化会館の属員として、タイ国バンコクに赴任することが要請される。バンコクの盲学校の創立者、米国のコールフィールド女史が軟禁され、後を日本人に経営して貰いたいという女史の願いがあつてのことである。そして熊谷にこの仕事に就く要請がきたのである。なにぶん戦禍の最中であり、「再び故国の土は踏めないものと覚悟して」(『薄明』二三三頁)二人の娘を連れて、家族四人でタイに赴任する。七月三日に神戸を出て、途中、サイゴン、プノンペンを経てバンコクに着したのは八月七日であった。一ヶ月以上費やしており、如何に行くだけでも大変なことであった。しかし異国での盲学校運営にはその国の事情もあり、順風満帆に都合良く運ばなかった。「私は一週間二日ずつ盲学校で日本語と衛生学

を教えることになりましたが、だんだん空襲がはげしくなり、盲学校へも流れ弾が落ちて大分ひどく破損したので、学校はバンコック市内から遠い田舎へ疎開することになりました」（『薄明』二三四頁）。これを機会に熊谷は盲学校講師を辞職する。

こうして一九四四年七月八日、志が成就できないまま、不本意な気持ちで帰途につくが、これもまた大変な行程であった。それは軍用貨物列車でブノンペンまでいき、九月三日サイゴン出發以来三ヶ月半危陰きわまりない帰途であった。二月一九日、神戸に無事着したときは裸同然であり、四五年三月大分県国東半島で無給伝道をしながらか、ようやく八月の終戦を迎えることとなった。熊谷は既に還暦を過ぎ六二歳の時であった。

### おわりに―見果てぬ夢

以上、戦前を中心に簡単に熊谷鉄太郎という人物の生涯を見てきた。一人の人物や思想、折々の機会での偶然的な出会いが、人生に大きな影響を与えることを実感した。ところで熊谷は生涯、「内省的盲心理学」というような著作を書きたい希望を持っていた。彼にとって盲人の本当の要求は「われわれの心の中（気持）を知ってもらいたいということであります」と述べるように、人々の同じ人間として真の理解と寄り添い（共感）ではなかったか。<sup>(29)</sup>

熊谷は七六歳の時、妻みえ子と、一九五九年十二月、東京都青梅市にある「信愛荘」（日本基督教団隠退牧師老人ホーム）に入り余生を過ごした。みえ子は六二年三月脳血栓で倒れ、熊谷は献身的に妻の介護にあたった。しかし七一年十二月二日、妻は七四歳で天に召された。葬儀は長年夫とともに住み馴れた信愛荘で級友・浜崎次郎牧師の司式で行われた。残された鉄太郎はそ

それから八年後、七九年七月一日、みえ子のもとへ旅だった。九六歳の生涯であった。

最後の著『薄明の記録』の終わりは「見果てぬ夢」という項目で終わっている。「私の夢は日本盲界の夢なのです。私自身の終着駅はここ青梅市の一角でありましょう。しかし私の夢は私とともに、ここに葬られるものではありません。必ずいずれの日にか、誰か有意の盲青年が、未完成的の私の夢を完成してくれることと信じます」(二三五頁)と。そして「得べくんばまためしいと生れ来て 見果てぬ夢の後を追いなん」という歌を記している。その夢を未来に託し、終の棲家である青梅のホームで持ち続けていた。「私の生涯の夢を一言でいえば、『私もはばかりながら人間よ』と大手を振って天下の大道を闊歩したいということです」(二三七頁)とし、次のように語っていた。

大学の教室においても、盲学校の教壇においても、会社のデスクにおいても、工場のワークルームにおいても、基本的人権を、晴眼者と同等のレベルで主張し、また尊重されるべきである。言いかえれば温情や憐憫でなく自由に出入りすることができる世界を造りあげたいということがあります。『みくにを来らせ給え』という私の祈りには、こうした世界が意識的に、あるいは無意識的に心の中に彷彿しているのです(同右)。

そしてこの著の最後に和歌三首が挙げられて終わっている。

我が夢は銀河の彼方億萬里 セラビム歌い ケラビム踊る

我は今久遠の道を歩みつ <sup>(ベウビ)</sup>ポーロと論じ、仏陀と語る

とことわに父のみむねに抱かれて みかおを仰ぐ夢 安らけき

熊谷の一生は「闇」の体験からキリスト教に救われた一生であった。そして福音を知ること



よって、洗礼を受け、神学を学びキリストの伝道者として民衆、とりわけ障害ある人々への「よき隣人」としての使いとなった。この世に生まれた人は同じ人間として幸福に生きる権利があるという当たり前のことが実現出来る日を夢見た生涯であった。

### 【注】

(1) 森田はその著の五章「熊谷鉄太郎と盲人牧師への道」と六章「ジャーナリスト・中村京太郎と牧師・熊谷鉄太郎」の中で熊谷を盲人福祉の先駆者の一人として評価し、好本督、中村京太郎、熊谷らを論述しながら、近代日本における「盲人福祉の一つの系譜」を論証した。

(2) このシリーズでは視覚に障害を持ちながらも、それを克服した人々の足跡があり、その背景には社会との軋轢、差別に立ち向かった人々、差別をエネルギーとして生きた人々の偽らざる吐露が記録され、そこに共通する生き方や人生の意味、人権の課題などが読み取れる。

(3) 例えば『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八九）、『世界盲人百科事典』（日本ライトハウス、一九七二）、『関西学院事典 増補改訂版』（関西学院大学、二〇一四）でも紹介されている。他に谷合侗の『盲人の歴史』（一九九六、明石書店）、『盲人福祉事業の歴史』（明石書店、一九九八）や『それど育て給うは神なり』（日本盲人キリスト教伝道協議会、二〇一一）といった通史等でも彼が取り上げられている。

(4) 例えば太田雅夫は「『自伝』の読み方…実証主義の立場から」（『桃山学院大学教育研究所研究紀要』九号（二〇〇〇））という論文で、「人物を描くときには、その人物に惚れ込むことがなければ、到底描くことはできないでしょう。しかし、全面的に惚れ込むのではなく、ある程度距離をおいて、客観的にその人物を観察しなければなりません。そして、その人物が書き残しているものを全面的に信用するのではなく、実証的に検証する必要があります」と恩師（岡本清一）の言葉を紹介している。自伝についてのこの指摘は重要である。

(5) 熊谷は寿都での生活を「ここ新栄町は全くの別天地——絃歌の響き、脂粉の香、なまめかしい女の笑声、酔うてくだまく男の罵声が、混然雑然として揚屋やそば屋の二階から流れてくる、そのなかを私は毎晩笛を吹いてまわるのです、早いときで夜中の二時頃、おそいときには宿に帰って寝るのは朝の四時頃にもなります」(『薄明の記憶』一三二頁)と回顧している。

(6) 中村満紀男・岡典子「日本の初期盲啞学校の類型化に関する基礎的検討」『東日本国際大学福祉環境学部研究紀要』七—(二〇一一)によれば、札幌の北盲学校は校長大澤銀之信によって、一八九五(明治二八)年に開校されていたが九八年に卒業生一人出し、九九年に三人、一九〇〇年三人といった状況で、〇二年には廃校となる。盲学校新築の資金繰りがうまく行かなかったものと思われる。

(7) この大澤につき『川畔の尖塔…札幌教会七五年史』(日本キリスト教団札幌教会、一九六四)では当時の年会記録に「東京の盲啞学校を卒業してこの地の盲学校の教師となりし者にて、偶然の事より求道の精神を起こし、大いに感動し遂に信徒たらんことを決心し、最初はその信仰を心に秘し居たり。然るに遂に彼は信仰を会友の前に述べ幸福を得たり。人々の中彼の心理を認むる事の速にかつ自ら得たる喜悦を述ぶるに甚だ熱心に驚かざる者となかりき。彼の盲目は少しも信仰上に障害を与えず、却って以前にも増して進歩を加えし如く思われたり」(二六頁)と大澤のことが記されている。

(8) 三谷雅之助は『闇を破って』の序で、熊谷を「回顧すれば、明治三十三年三月、北海の天地は未だ寒く数尺の積雪さへありし其の当時、十六歳の盲人熊谷君、始めて我が札幌メソヂスト教会の牧師館を訪づれ、其より孜々求道研究、新しき光明を見出し熱心なる信者となられた」(三頁)と評している。

(9) 『川畔の尖塔』には「現札幌教会婦人会の元老山田八重は花も盛りの淑女としてこの祈禱会に出席しており、同年八月熊谷ら数名とともに洗礼を受けたのである」(二七頁)と記されている。

(10) 熊谷は入学につき次のように回顧している。一九〇二年一月二九日、「東京盲啞学校へ行つて、校

長小西信八先生に御目にかゝり、上京の次第を物語つて入学を許された時の私の嬉しさは、実に、何者にも例へやうのないものであつた。――祈りが聞かれた………………。七年間の夢が実現された！」〔闇〕一三六頁〕と。

- (11) 東京盲啞学校の歴史については『東京盲学校六十年史』（東京盲学校、一九三五）を主に参照した。盲啞学校はその後、幾多の変遷を経て二〇〇七（平成一五）年四月、筑波大学附属視覚特別支援学校（通称は筑波大学附属盲学校）となっている。

- (12) 校長の小西信八（一八五四―一九三八）は最後の出身で東京師範学校卒業。盲学校校長時代から長きに亘つて盲教育に対して多くの貢献をした。盲啞学校の分離についても一八九九年七月に既に小西が盲学校と聾啞学校の二つに分散させる「上申書」を文部大臣に提出している（『東京盲学校六十年史』二二六―二二九頁）。小西については下田知江「日本点字の祖父…盲啞教育の師父・小西信八先生」『盲界事始め』（あずさ書店、一九九一）も参照した。

- (13) 『日英の盲人』と共に好本の『真英国』（秀英社、一九〇二）も熊谷に大きな影響を与えた。この著で内村鑑三は「今や皮相的英国を日本国に紹介する者千百を以て算へらるゝに方りて親友好本督君は博愛的英国を吾人に伝へらる、吾人大に君に謝する所なくして可ならんや、英国の同盟国たる日本は其陸海軍を以てのみ同盟の実を挙げべきにあらず、英国の教育と慈善に学び、英人に倣ふて盲者、啞者は勿論無言の禽獣までを人らしく待遇ふに至て吾人は始めて英国の同盟国たるの名に恥ざるに至るを得べし、此書此時に方て出づ、豈天意と称せざるべけんや」と「序文」を寄せているのも注目され内村の福祉観・文明観が窺える。

- (14) 高木壬太郎（一八六四―一九二一）は静岡県生まれで山路愛山と親交を結び、一八八六年愛山と共に平岩誼保から受洗し、東洋英和学校神学部を卒業し、カナダのヴィクトリア大学にて博士号を取得した。一九〇〇（明治三三）年五月、本郷中央会堂の牧師（駒込教会と兼牧）に任命されている（『日本キリスト教歴史大辞典』教文館、参照）。熊谷は高木について「先生の説教は、何時もながら実に堂々たるものであつた。私は吸ひつけられるやうに、先生の説教に聞き入つたものである。中央会堂に

あれだけ沢山の人が居たが、私ほど先生の説教に注意を払ひ、またよく是を記憶してゐたものには外にあるまいと思はれる。私は忠実に教会に出席した。学校の式日と日曜の礼拝とがかち合ふやうな場合、私は学校を休んで教会に行き、学校からは叱られたものである」(『闇』一三二六―一三七頁)と述懐している。

- (15) 『六星の光』については大塚美紀「点字雑誌『六星の光』に見る視覚障害当事者の教育と生活」…研究ノート／日露戦争前後の官立東京盲啞学校盲生同窓会を中心に」『東京社会福祉史研究』七号(二〇一三)を参照した。ちなみに前掲の下田の著書『盲界事始め』では『むつぼしのひかり』となっている。

- (16) 『東京社会福祉史研究』二号(二〇〇八)所収の大塚美紀「資料紹介／点字雑誌『六星の光』掲載論稿(墨字訳)」(二)刊行初期における盲人の教育問題に関する論稿を中心に」の熊谷の論考より引用した。

- (17) 津曲裕次監修『障害者教育福祉リハビリテーション目次総覧第一巻』(大空社、一九九〇)所収の『むつぼしのひかり』には創刊号から四七一号(一九四三年三月)までの目次が収載されていて、熊谷も三八編の文章(内二七編が論説、一編が祝辞、一〇編が雑録)を執筆している。

- (18) 『東京社会福祉史研究』一〇号(二〇一六)所収の大塚美紀「資料紹介『六星の光』掲載論稿(墨字訳)(九・完)」の熊谷の論考より引用した。

- (19) 左近允孝之進(一八七〇―一九〇九)は鹿児島で生まれた。早稲田中退である。成人になってから失明した。神戸で鍼灸を開業し、神戸訓盲院を設立した。点字雑誌『あけぼの』を刊行したことでも有名である。ちなみに左近允を扱った小説に山本優子著『見はてぬ夢を』(燦葉出版社、二〇〇五)がある。

- (20) ベーツに関しては、神田健次・池田祐子編『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』(関西学院大学出版会、二〇一九)や『関西学院七十年史』等を参照した。

- (21) 曾木に関しては、『神学研究』二号(一九五三)所収の木村蓬伍「曾木銀次郎先生の倂―八八年の内的遍歴の瞥見」、大石繁治「曾木銀次郎先生のプロフィール」等を参照した。

(22) 岩橋の熊谷との出会いについては、拙稿「岩橋武夫研究覚書…その歩みと業績を中心に」、『関西学院大学人権研究』一九号(二〇〇九)を参考されたい。ちなみに日本点字図書館を創設した本間一夫も函館盲学校在学中に熊谷の講演を聴いたことが、関西学院入学への動機となっている。

(23) この趣意書は森田昭二の研究によって明確になった。森田昭二『盲人福祉の歴史』二二四～二二五頁から引用した。

(24) 全国盲人文化大会については大阪の『救済研究』『大阪毎日新聞』等にその報告があるが、これについては森田昭二の前掲書、二六九～二七六頁で詳論されている。エロシエンコについては、高杉一郎『夜あけ前の歌(岩波書店、一九八二)』を参照した。同書には彼と高尾や岩橋との交友も描かれている。

(25) 『日本メソヂスト教会第貳拾壹回西部年会記録』には「伝道師にして執事の按手札をうけんと欲する者」(九頁)として熊谷の名を見出すことができる。

(26) 熊谷はヘレン・ケラーとの出会い、半日共に語る機会があり、ケラーとの会話が円滑に運ぶかと心配していたが、「世界の盲人問題、哲学や宗教の問題、さては満州問題等々と、話はそれからそれと淀みなく流れて何のさし障りもない」とサリバン女史やポーリー・タムソンの名通訳もあり、心配は杞憂に終わりで有意義な出会いであったと述懐している(『見えざる聖手』五六頁)。

(27) この著の「はし書」に「私は、単に基督教と云はず、苟くも人の生涯に影響した程の宗教経験を、分析解剖した結果、信仰の対照物なるものが、少くとも信じてゐるその人にとつては、客観的の実在でなくてはならないと云ふ結論に到達すべき事を、力説高潮したつもりである。」と記している。

(28) キリスト教界への弾圧については、同志社大学人文科学研究所編『戦時下の基督教運動1～3』(新教出版社、一九七二～七三)を参照。救世軍への弾圧については拙著『山室軍平』(ミネルヴァ書房、二〇二〇)を参考されたい。

(29) 熊谷と盲人伝道において同労の人物、石松量蔵も一九二五年に『盲人心理の研究』という著作を自費出版(戦後、五六年に改訂版)しており、同じような問題意識をもっていた。